



「父への電話」

(財) 地方公務員等ライフプラン協会

佐伯 友彦

「ど

ない調子は！ 元気にやってる？ こっちは元気にしてんで。そんでな…」

週に1度、実家に連絡を入れています。

父親が脳梗塞で緊急入院して7年経ちます。それまで元気で何ともなかった父親が、突然、ろれつが回らなくなりしゃべることができなくなってしまいました。

あわてて病院で診てもらったところ、「脳梗塞です。至急入院が必要」との診断。

脳梗塞でも比較的軽い程度であったため、入院治療で済んだことはほんとうに不幸中の幸いでした。

母親から連絡を受けた私は、翌日、東京から神戸へと急いで帰り、その足で病院へ見舞いに行きました。そして、予想以上に元気そうな父親を見て、ようやく安堵を感じることができたことを今でも覚えています。その後、父親は数週間で退院することができ、日常生活においても全く問題のないほど回復しました。

社会人となり今年で16年目になりますが、大学卒業後、関西で採用された私はすぐさま関東の支店に配属となりました。その後も関東での勤務が続きました。社会人となって3年目ぐらい迄は、年に4～5回程度は帰省していましたが、いつの間にか正月に1回というのが定例となりました。また、実家への電話も特別な用件がない限りしなくなっていました。年々、親との接点は少なくなっていました。

父親の病気は、それまでの自分を一転させるきっかけとなりました。親はいつまでも元気で遠くから見守ってくれる存在＝支えてくれる存在から、いつの間にか、高血圧等の健康にも留意しなくてはならない存在＝支えてゆかなければならない存在になっていたのだと思うようになりました。そして、何でもいいから「もっと親に接するようにしよう！」と考えるようになりました。

以降、必ず週に1度は実家に電話を入れようと心がけました。最初の頃は父親の健康状態が気になるため「適度な運動が大事やで！」とか「バランスのええ食事しいや！」等、自分自身が出来ていないことを偉そうに言っていたように思います。

そんな電話でも、いつも父親は「子供の声をきくのが一番の薬やわ！ いつも電話ありがとう」と言ってくれました。私はその言葉をきくたびに、幼い頃親に褒めてもらった時のことを思い出し、何とも言えない懐かしさや安らぎを感じるようになっていました。父親のために電話をかけていたつもりが、いつの間にか自分のために電話をかけていることに気づいたのです。やはり、自分にとって親は支えてくれる存在であることを痛感しました。

どのような方法でもいいから、自ら進んで親との接点をつくることの大切さを知りました。私はこれからも、親のために、そして自分のために、週に1度は連絡をしようと思っています。

